

職責を全うしようとして

災害時に殉職される方がいます。職業や災害の状況などはさまざまですが、それぞれに自らの職責を全うしようとして命をなくされました。各地に殉職者の慰霊碑が建立されています。高知県四万十市と北川村の例をお伝えします。

■校長の殉職（高知県四万十市）

昭和20年（1945）9月17日、枕崎台風が西土佐村（現四万十市）を襲いました。山林の大木が倒れ、家屋は倒伏、浸水し、決壊等により交通・通信は途絶し、田畑の被害も甚大となりました。特に四万十川沿岸一帯の地域は危険にさらされ、昭和10年に流失し昭和12年に復旧していた抜水橋が増水のため再び流失するなどしました。豪雨の中を人々が避難する中、中半（なかば）国民学校では校舎が倒壊して、校具を搬出中の校長が殉職するという惨事が起こりました。西土佐村立中半小学校は昭和63年に閉校し、現在は自然体験型宿泊施設・四万十楽舎として活用されていますが、その校庭の端に校長先生の殉職の碑が残されています。〈西土佐村史編纂委員会編「西土佐村史」1970年〉



■消防士と警察官の殉職（高知県北川村）

昭和46年（1971）7月25日深夜から集中豪雨となり、北川村加茂地区では浸水が始まりました。加茂地区は鉄砲水の出やすい所で、この時もあっという間に加茂川が増水し、道を越えて浸水しました。このため、警戒に当たっていた中芸消防署員が徒歩で進むうちに幅2.5mの村道が決壊し、一人の消防士が急流に転落して行方不明となりました。さらに、その転落事故を知って救助に向かった安芸署の警察官も決壊道路から転落して行方が分からなくなりました。近隣の消防団員、警察署員、地元民ら約200人が出動し、夜通しで捜索が行われ、26日午前中に二人の遺体が下流で発見されました。加茂地区に殉職碑が建立されています。〈吉本珖編「新安田文化史」1975年〉

